

令和7年度第6回一関市総合計画審議会 会議録

- 1 会議名 令和7年度第6回一関市総合計画審議会
- 2 開催日時 令和7年10月15日（水） 午前10時から正午まで
- 3 開催場所 議員全員協議会室
- 4 出席者
 - (1) 委員 阿部利彦委員、泉賢司委員、伊藤拓也委員、岩渕一司委員、宇津野泉委員、大内早智子委員、小山亜希子委員、加藤沙央里委員、小岩邦弘委員（会長）、西條恵美子委員、齊藤裕美委員、東海林訓委員、菅原美津代委員、千田久美子委員、千葉真美子委員、徳谷喜久子委員、船山賢治委員、藤本千二委員、星義弘委員、吉田正弘委員
 - ※欠席者 及川恵理子委員、小山健委員、菊池正人委員、佐々木承子委員、佐藤ひかる委員、千田好記委員、吉田捺委員
 - (2) 事務局 今野薫市長公室長、飯村昌弘市長公室次長兼政策企画課長、小山隆之政策企画課長補佐兼政策推進係長、佐々木さやか政策企画課主任主査、渡辺苑子政策企画課主任主事、谷藤義拓政策企画課主任主事
 - (3) 一関市総合計画策定支援業務受託者 株式会社邑計画事務所 阿部芙貴子取締役

5 内容

(1) 議題

ア 次期総合計画前期基本計画答申案について

イ 現総合計画後期基本計画「主な指標」令和6年度実績に対する質問等への回答

(2) 答申

一関市総合計画前期基本計画について

6 公開、非公開の別 公開

7 傍聴者の数 2人（うち報道機関 2社）

8 小岩会長挨拶

本日はお忙しいところ出席いただきありがとうございます。

本日はいよいよ答申である。前回の審議会でもいただいた意見に対する修正箇所を中心に確認していくのでよろしくお願いしたい。

9 議題

(1) 次期総合計画前期基本計画答申案について

事務局から資料No.1～No.3に基づき説明を行った。以下、質疑応答等。

委員 13ページ目の重点プロジェクト「I L Cの実現を見据えたまちづくり」に「国際的な科学技術の拠点が形成されるとともに、その家族など多くの人々が当市に転入し生活を送ることが見込まれる」とあるが、ここまで具体的に記載してよいものなのか。研究施設が市内に建設されることは決定事項なのか。

事務局 研究施設が市内に建設されるかどうかは、市に決定する権限はなく、そのように公表している計画書等もないため、一般論として記載しているものである。研究施設に研究者コミュニティとして家族が転入してくることについては、ある程度の見込みを立てており、人数も試算している。

委員 「見込まれる」という表現なので間違いではないと思う。

委員 5ページ目の「一関ってこんなまち」の通勤・通学者の欄に、一関市には在来線や新幹線の駅があり、各種学校もあり便利であるという内容を書き加えてはどうか。

会長 このページは今後も更新していくので、ご意見として承る。

委員 27ページ目「まちにつながる人の拡大」の「若年層に向けた移住・定住の取組の強化」にある「若年層」という言葉が気になる。若年層の定義は様々あるようだが、どのような考えでこのような言葉を選んだのか。

事務局 総合計画においては具体的な若年層の定義はしない。「目指す姿の取組に向けて必要なこと」の最初に記載している「戦略的な移住人口、関係人口の創出」を受けての「若年層に向けた移住・定住の取組の強化」であり、若年層の定義を含めた具体的な内容は個別計画や具体的な施策の中で定めていく。

委員 移住・定住に関する個別計画はないというように聞いているので計画の策定も含めて検討いただきたい。

委員 13ページ目の重点プロジェクト「I L Cの実現を見据えたまちづくり」について、現在進めているインフラ整備などのまちづくりも、I L C実現に向けた取組と言えるのか。また、I L C実現を見据えた人材育成とあるが、どういった人材を想定しているのか。

事務局 I L C実現を見据えたインフラ整備として、駅東工場跡地の開発が挙げられる。跡地のすべてをI L C関係用地と位置付けているわけではないが、I L Cの誘致が決定された際には当然この土地の活用方法についても考えていく。合わせて、道路の整備についても県や国に対し要望を出しているところである。

人材育成については、ものづくり人材の育成に力を入れている。具体的には一関高専の学生に地元のものづくり産業に貢献してほしいという考えの下、一関商工会議所、一関高専、その他関係団体等で協定を締結し、協力してものづ

くり人材の育成に努めていこうと取り組んでいる。

委員 今、話があったような具体的な事項を記載することはできないのか。

事務局 具体的に記載することは難しいと考えている。I L Cの実現に対して、明確に反対している団体がいて、様々な市民的議論がなされていることは承知している。現在、I L C実現に関する権限は国際研究者コミュニティの中にあるため、日本政府が表明したとしても決定するものではない。重点プロジェクトで「実現を見据えた」と表現しているのは決定権がないからであり、そういった中で具体的に記載するのは難しいと判断した。

委員 35ページ目「多様な働く場づくり」にある誘致企業数のグラフについて、累計であることを記載したほうが分かりやすい。

事務局 修正する。また、グラフの数字に誤りがあったため報告する。令和6年の数値が「34」となっているが「32」が正しい。さらに、「年」表記となっているものを「年度」表記に修正する。

委員 37ページ目「働くことにつながる環境づくり」にある新規高等学校卒業者進路状況のグラフについて「就職（管外）」が2つあるので修正をお願いしたい。

事務局 1つを「進学等」に修正する。

委員 5ページ目の「一関ってこんなまち」の大槻文彦の説明書きに「日本初の辞書」とあるが、誤解を招くので「日本初の近代的辞書」などの書き方にしたほうがよい。

委員 13ページ目の重点プロジェクト「I L Cの実現を見据えたまちづくり」に、研究者とその家族の転入が見込まれるというような記載があるが、このことも踏まえての10ページ目「将来展望人口」なのか。また、I L Cが実現できなかった場合、重点プロジェクトの4分の1が消えてしまうわけだが、計画としてそれでよいものか。

事務局 重点プロジェクトは、具体的な取組を進めるにあたって重点的に考慮することをまとめており、I L Cが実現できなかった場合でも、考え方や取組などが全て無くなるというものではない。

また、将来展望人口ではI L Cの実現を踏まえた人口推計はしていない。総合計画に掲げる施策を展開していく中で人口減少の幅を抑えていきたいという考え方の推計である。

委員 6ページ目の「一関ってこんなまち」の住みたい田舎ベストランキングの「田舎」という言葉がネガティブに感じるので、他に良いランキングがあれば変更をお願いしたい。

委員 7 ページ目「施策体系」の右下の記載に一部見切れているところがあるので修正をお願いしたい。

委員 I L C の研究施設は、衝突地点となる20キロメートルのトンネルの中央地点に設置されると思うが、中央地点はどの辺りになるのか。

事務局 研究者が作成した構想によると、一関市大東町近辺が衝突地点となる。

委員 アクセスを考えると新幹線の駅に近いほうが良いと考えられるが、そういったことも含めて大東地域が想定されているのか。

事務局 研究施設は1 か所ではない。研究者が往来しやすい駅に近い場所にキャンパスがあり、衝突地点に近い場所にデータを研究する施設が必要となる。また、研究者コミュニティでは、トンネルを20キロメートルから徐々に拡大し、将来的には50キロメートルにしたいという構想を持っており、奥州市や気仙沼市まで地下トンネルが作られることとなり、付随して様々な研究施設が必要になってくる。

委員 駅東口にビジターセンターのような建物を作ることも構想されているのか。

事務局 そのとおりである。

会長 時間があるので、全員から一言ずつお願いしたい。

委員 I L C を重点プロジェクトに位置付けたのは、実現に向かって進むことで一関を活性化しようということだと思う。

計画案をこのようにまとめていただきありがとうございました。

委員 委員の意見、市の考えが盛り込まれた計画になったと思っているが、これで終わりではないということを肝に銘じて私たちも取り組んでいかなければならない。I L C についても、旧一関市以外にはなかなか恩恵がなく、各地域のことを総合計画に盛り込むことは難しいと思うが、そういったことも頭に入れながら進めていかなければならない。市全体の人口が少なくなるほど、一つのコミュニティに特化することなく進める必要がある。

駅東口工場跡地の利活用も他力本願のI L C を待つのではなく、別の活用方法を考えてほしい。

委員 皆さんでこれまで積み上げてきたものが形になり、大変良かったと思う。今後10年間の屋台骨が出来上がったので、これから各部署の施策で数字を積み上げていくことで、少しでも一関市が良い方向に進めばよい。

委員 高齢化は免れないので、高齢者も対象に含めて具体的な施策を進めてほしい。

委員 言い回しなども良く考えられた計画になったと思っている。

「フレイル予防」という言葉が使われているが、あまり浸透していないように思うので注釈をつけるなどの対応が必要である。

事務局 全体を通して、カタカナ文字や分かりにくい言葉には注釈をつけて、冊子の形にしたいと考えている。

委員 委員の皆さんが様々な視点から専門的な分野で意見を取り交わして出来上がった今回の計画に基づいて、私たち地域協働体も同じ目標の実現を目指して取り組んでいきたい。

委員 個別計画の欄について、今後も整理して仕上げていくという話があったので、それぞれの分野で策定中の個別計画とも内容を擦り合わせていただきたい。

委員 一関市は水道管や道路延長が長い。これらを維持するためには税金がかかるが、人口が減ると税収も減少するので、対策を検討していかなければならない。北上市では自動運転の車を試験的に走らせていると聞く。一関も新しい試みに取り組んでいってほしい。

委員 37ページ目「働くことにつながる環境づくり」にある新規高等学校卒業生進路状況のグラフについて、市内高等教育機関への進学率を出せないか検討してほしい。人口が減るスピードが緩やかになるような魅力的な一関を目指し、様々な意見を出し合ってこのような良い形にまとまり、皆さんも手応えを感じているのではないかと。今後も同じベクトルで一緒に頑張っていきたいと思うのでよろしく願いたい。

事務局 「進学等」には予備校や自宅で勉強する場合も含んでおり、これらを把握することが難しく、市内高等教育機関への進学率を表記することができない。

委員 一関の将来に向けて、良い計画ができたのではないかとと思っている。特に「いちのせきってこんなまち！」のページは、改めて知る一関の良い部分があり、良いページだと思う。皆で積み上げた計画なので、書面だけの話で終わるのではなく、目標に向かって皆さんと一丸となって取り組んでいきたい。

委員 先月の審議会でも「いちのせきってこんなまち！」のページに市が主体的に取り組んでいることを入れてはどうかと発言したところ、今回の資料では修正されており、前よりも良くなったと感じている。

市で取り組んでいることがなかなか市民や市外に住んでいる方に伝わらないので、計画に書いていないことも含めて伝えられるようになれば良いと思う。

委員 今回の計画は温かみのある内容になっていると思う。また、毎回、膨大な資料を用意していただいている職員の方々に感謝している。今後、具体的な事業に落とししていく作業が一番面白いところだと思うので、十分に時間を割いてい

ただきたい。

委員 当初 I L C 建設の話が出たとき、建設業界全体が盛り上がったことを懐かし
く思う。待ちくたびれた感は否めない。

計画を策定する中で、一関の良いところをたくさん見つけることができた。

また、一つの単語から受ける印象が人によって全く違うということが勉強に
なった。一つ一つの言葉を大切にした文章が散りばめられた内容になったと感
じている。

委員 最初に会議に参加した際、こういった計画があることを知らなかったという
話をした。皆さんの時間と苦労が積み重なって、素晴らしいものができたと思
っている。

国がこどもまんなか社会の実現を掲げる中で、今回の総合計画には「こども」
や「子育て」という言葉が前面に出てきてくれて本当に嬉しい。

委員 10年後を見た計画なので、10年後に目標が実現できることを期待している。

委員 審議会において、自分の生活や仕事に全く関係ないことを考える時間があっ
たのは幸せだったと思っている。

今後、パブリックコメントなどで様々な意見があると思うが、負けずに頑張
ってほしい。

委員 基本計画でこれだけの分量があるので、実施計画や個別計画になるともっと
すごい量になると思う。

行政が抱える課題は多く、市民の期待が大きいという状況の中では「あれも
これも」と拡散しがちであるが、そういったときには核となるものに立ち返っ
て、考え方を絞って取り組んでほしい。

人口推計ではゆっくりとした下降傾向になっているが、どこかの時点で突然
落ちるときが来るのではないかと心配している。その時に一関市として何を優
先的にやっていくべきかということを覚悟して考えておかなければならない。

また、重点プロジェクトが4つあり、このうち1つが駄目になった場合、4
分の1が欠落してしまうという意識に陥ってしまうが、そうではなく、一関が
目指すことのプラスαとして I L C があるのであって、もし実現できなくても、
一関はしっかりやっていけるというような意識でいたほうがよい。

委員 基本構想の策定からこの基本計画まで、やっと完成したという思いである。
最初のワークショップに参加したときに、計画の細部まで作成できるのか不安
であった。多方面な記述が必要であり、自分が経験していないことも考えなけ
ればならず構成を組み立てる中で苦労があったと思う。言葉の選択も、概論に

すると伝わりにくく、具体的にすれば方針がずれる可能性もあり、計画作りの難しいところであった。

将来像の「ひとりひとりが輝く 挑戦しつづけるまち いちのせき」という形に市民全体で持っていければ良いと思うので、これからも微力ながら協力していきたい。

委 員 市役所で夜の会議に出席し、21時頃に帰ると事務局の方々とよく会う。この資料に落とし込むのに大変な苦労があったと思う。

私は長い間、委員としてここに座っているが、今後若い方たちの意見がもっとたくさん取り入れられるような形の会議にしていっていただきたい。

会 長 細かい修正は必要であるが、この案で市長へ答申してよろしいか。

(賛成の声)

会 長 承認いただいたので、この内容で市長に答申する。

昨年の6月に諮問を受けてから、計14回審議会を開催した。本当にありがとうございました。

審議会として前期基本計画をまとめたので、今後は市の案としてパブリックコメントを実施し、議決を経て、決定となる。

皆さんからも話があったとおり、これからはこの総合計画の策定に携わった者として、地域に戻って率先して動いていただければと思う。私もそのようにしたいと思っている。

(2) 現総合計画後期基本計画「主な指標」令和6年度実績に対する質問等への回答

資料No.4を配布した。説明と質疑応答は省略し、質問等があれば会議終了後に事務局へ提出するよう伝えた。

10 答申

小岩会長から市長へ、一関市総合計画前期基本計画について答申を行った。

11 市長挨拶

ただいま総合計画前期基本計画について答申を頂戴した。大変お疲れ様でした。

答申書の付記事項にもあるとおり、人口減少による影響は大きく、基本構想、前期基本計画の内容を検討する際には、人口の動きと合わせてどのようにしていくかという議論がなされたと想像している。

先の市長就任式で市職員に対して2つのことを話した。

1つ目は「一隅を照らす」という話である。これは最澄の言葉であり、解説は必要ないと思う。

2つ目は「We Can Change」という言葉である。

合併により新しい一関市ができてからの20年間だけで見ても、人口が約3万人減り、今後さらに約2万人減る。つまりは、30年～40年の間に人口が約5万人減るという状況となってくる。この人口減少によるダメージを減らしていくことに注力していかなければならない。人口が減っていく中でも毎日の暮らしをキープしていくためには様々なことを変えていかなければならず、「C h a n g e」することが必要である。さらには、何かを変えるためには自分がまず変わらなければならない。一関市役所というチームとして変わっていきましょうという話をした。

変化が激しくなる次の10年間、その中の前期5年間で形作る作業は大変だったと思う。内容は時々事務局から報告を受けていたので、概要は把握していたが、非常にハードな変わり目に入っていくことを実感しており、覚悟を持たなくてはならないと思っている。

基本構想は、今後10年間でどういったところを目指していくかという精神的なものが含まれていたが、基本計画は総合計画であるがゆえに難しいところが多々あったと思う。総合計画の「総合」には2つの意味があると思っている。

1つ目は「ありとあらゆるものを含んだ、漏れの無い」という意味、2つ目は「全体を総括する」という意味である。

基本構想という精神的なものを含んだ中でさらに具体的なものを漏れなく織り込みつつ、全体的な考え方を淘汰していくというのは極めて難解な作業であったと思う。各論のある総論はかなり難しい。重ねて感謝申し上げたい。

今度は頂戴した答申を市の案として議会に提案する。議員の皆様方に、市の案として説明し、ご理解いただく。

新しい総合計画がスタートするまで半年を切ったので、しっかりと準備を進めながら、新しい総合計画の下で市政を進めていく。各論も大事であり、各論を束にした総論も大事である。矛盾するところも出てくるが整理をしながら進めていきたいと考えている。今後は計画の推進というステージに変わるが、引き続きまた皆様方と一緒にこの新しい計画を盛り立て、一関市としての将来を作ってまいりたい。

12 担 当 課 市長公室政策企画課